

(Ⅳ - 24) バンコクにおける行政区界の成立とその特性の分析

日本大学理工学部 学生員 吉井 信
日本大学理工学部 正会員 福田 敦
日本大学理工学部 学生員 村松繁延
日本大学理工学部 学生員 渡辺香一郎

1. はじめに

一般に交通計画などで用いられるゾーニングは、既存の行政区界を基礎としてなされている場合が多い。これらの行政区界を見ると、川や山などによる地形上の制約や、道路や線路などに基づいて境界を設けていることが多く、幾何学的な観点から行政区界の形や面積を考慮したり、土地利用などの社会・経済的な要因を考慮したものは少ないと考えられる。特に、東南アジアの各都市では、ゾーニングが進んでおらず、データの収集や整備の遅れの一因ともなっており、その基礎となる行政区界の実態を把握する必要がある。

そこで本研究では、東南アジア都市におけるゾーニングの方法を検討する基礎として、行政区界がどのように形成されてきたのかを、タイの首都であるバンコクを例として分析すると共に、その特性を明らかにするものである。

2. 行政区界の変遷

1905年当時のバンコクは16の行政区界によって構成されていた。しかし、1961年ではその数は22行政区界にまで増加しており、1985年になると1905年時の倍以上にあたる36行政区界にまで増加している。これに伴いバンコク全体の面積も、1905年の748.60Km²から1961年には現在とほぼ同じ面積の1519.10Km²へと大幅に増大し、1985年には1571.19Km²となっている。

一方、各年代の行政区界の平均面積を比較すると、1905年は46.79Km²であるのに対し、1961年には69.05Km²と増大したが、1985年では43.64Km²と大幅に減少している。これは、1905年から1961年の間のバンコクの拡大が、広大な面積をもつ行政区界を取り込みながらのものであったために平均面積が増加したものであり、また、1961年から1985年の間は、都心部における行政区界を細分化したため、行政区界数が増加したにもかかわらず、平均面積が大幅に減少したと考えられる。この結果、バンコクにおける行政区界は、都心部と郊外部との面積格差が拡大していった。

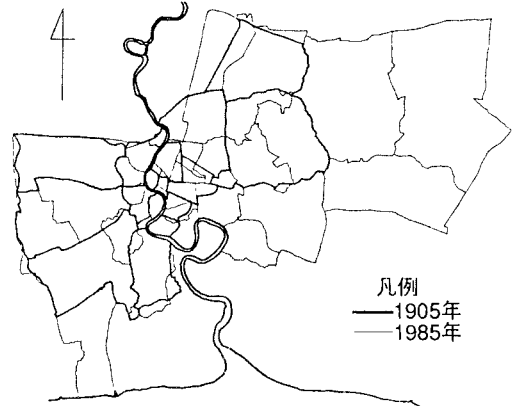


図-1 バンコクにおける行政区界の変化

3. 物理的な境界の年代別変化

バンコクにおける行政区界が、物理的にどのようなものによって形成され、またそれがどのように移り変わってきたかを、バンコクの都心部を対象として分析した。ここでは、境界を「川」「道路」「鉄道」「その他」に分けて分析を行なった。

図-2の領域図を見ると、境界の成分の中で最も大きな割合を占めるのは、どの年代においても「川」であることがわかる。これは、バンコクが河川や水路を中心として発達してきた都市であるということを如実に表している。また、川によって区画された行政区界の多くは、不規則な形をしており、自然の地形に沿っていることがわかる。

「道路」による境界は、1931年前期までは一切見られなかったが、1931年後期以降になると徐々に境界として利用されるようになった。これは、バンコク都心部で道路網の整備が行われ始め、この道路に沿ってゾーニングが行われたためだと考えられる。逆に、郊外部の比較的面积の大きい部分においては、道路による境界はほとんど見られない。

「鉄道」による境界は、1910年以外は徐々に増加が続けてはいるが、境界全体に占める割合としては減少

している。このことから、バンコクにおいては、鉄道よりも道路網がより発達していったことがわかる。

「その他」については、年代が進むにつれて徐々に減少していることがわかる。これは、地図の精度の向上と共に境界に利用されたものが、次第に地図上で判読できるようになったことが一因として挙げられる。

4. 各年代の一致率の推移

各年代の境界の一致率を図-3に示す。1905年とその他の年代の境界の一致率の推移をみると、1910年とは73%、1931年とは80%、1958年とは60%、1985年とは74%となっており、増減を繰り返している。1910年と1958年以降の境界の一致率は、1905年と1958年以降の一致率よりもむしろ低くなっている。1931年前期については、後期との一致率が99%と極めて高く、この間の境界の変化がわずかであることがわかる。1958年以降の境界については、1985年までの3つの年代とも90%以上の高い一致率を示しており、この間の行政区界の変動が少なかったことを示している。このことは言い換えれば、境界が決定されてきたと言えるであろう。1985年になると、どの年代の比較においても一致率の上昇がみられる。これは、一度利用されなくなった境界が再び利用されるようになったためであると考えられる。

5. 人口と人口密度の推移

行政区界の変化と共に、行政区界平均の人口および人口密度がどのように推移してきたかを算定し、図-4に示す。

1960年から1982年にかけては、人口、人口密度共に徐々に増加しており、これは、行政区界の変更などによる急激な面積変動がなく、人口の増加に連動して人口密度も増加していったものと考えられる。1982年から1983年にかけて、人口、人口密度共に大幅に減少している。これは、ただ単に人口変化による要因だけであるとは考えにくく、行政区界の大幅な変更による面積の変化や、調査方法の変化、スラム等の取り扱いの変化など様々な要因が重なってこのような結果になったと推察される。1983年以降は、人口に関しては再び増加しているが、人口密度を見ると徐々にではあるが減少していく傾向が見える。これは、行政区界面積の小さいバンコクの都心部に集中していた人口が、行政区界面積の大きい郊外部へ徐々に分散していったためであると考えられる。

6. おわりに

今回はバンコクの行政区界の変遷と特性について分析したが、結果をみると、バンコクは都市の発展と共にゾーニングがなされてきたと言えるであろう。

今後は、各国における「都市」の定義というものを明らかにし、行政上のゾーニングと、本研究で扱った物理的なゾーニングとの関連性を分析して本来のゾーニングの有り方について検討することが必要であろう。

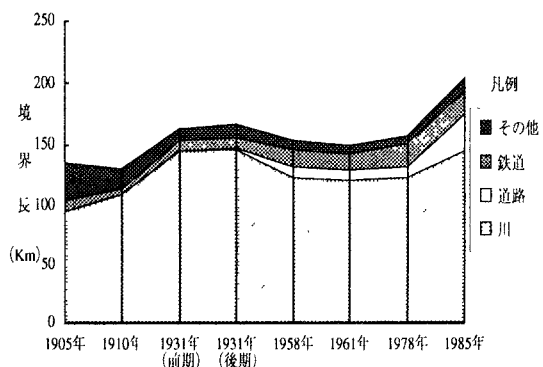


図-2 年代別種類別領域図 (実測)

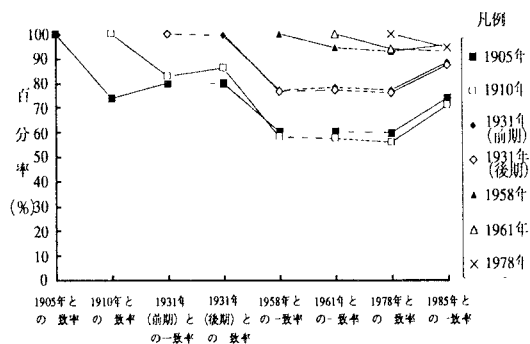


図-3 各年代との境界の一致率

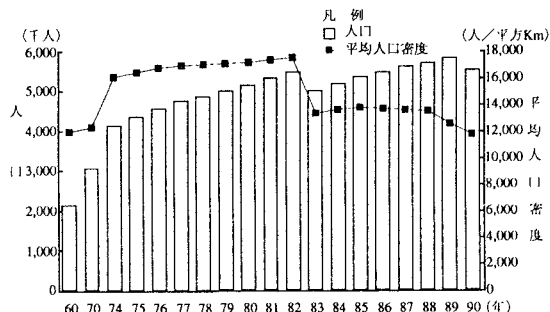


図-4 人口と人口密度の推移